



ママの乳房の谷間から引き離された途端、赤ん坊はけたたましく泣きだした。

白いガウンをラフに羽織り、白いベッドカバーから半身を覗かせ横たわっているママ役は、実の子供を取り上げられてしまったわけだが、そこはプロ魂を貫き、困惑の表情など微塵も見せず慈愛に満ちた笑みを崩さない。キスギチーフが当ててるキーライトが彼女の上半身をやさしく浮き立たせているが、まだ、監督はこのシーンのカメラを回そうとはしない。キーライトが太陽光じゃなくて人工光だからだろうか・・・。

折角、自然光を取り入れた撮影をするために横浜山手の洋館を借り、窓辺にベッドを置いてのデイトムロケなのだから、眩いデイトムライトに包まれた母子の命のシーンを撮りたいところなのだが、生憎、窓の外は台風の暴風雨が吹き荒れていて、バッテリーライトの人工光と曇天外光のミックスでなんとかしなければならぬ。カメラも自分で回す今回の監督はとにかく光のコントロールへのこだわりが並大抵じゃない。もうこのシーンのセッティングだけで五十分以上費やしている。その間、ずっとサードのオレは窓辺に立ち、レフ板を両手で掲げ、外光の反射光をママ役の彼女の上半身に当て、キーライトを補完し続けている。腕が痺れて千切れそうだ。アングルが決まらないせいで三脚固定できないのだ。タッチライトを当ててるセカンドのヤジマさんもライトを手持ちのままだから辛そうだ。

—優れた照明マンとは、まず光を自在に操れること。

—そして、監督やカメラマンの意図を素早く察することができること。

—更に、自分の光のプランを彼らに堂々と提案できること。

と、このまえ有難くも訓示してくれたヤジマさんは、今朝、土砂降り雨の中、クソ重たい機材を運んでいる時、後ろからオレの肩を叩いて、

「まあ、しかし、優れたサードの照明マンは、力持ち、かつ、晴れ男でなければならない、だな」と声をかけてきた。

振り向くと、十七キロあるという通称シネキン・バッテリーの入ったケースを軽々肩に担いでた。信じ難い屈強さだったな。

スタイリストのねえちゃんが泣きじゃくる赤ん坊を控え室に連れ去ると、監督が、「ちょっと赤ん坊替え小休憩」と号令。

オレはレフ板を降ろす。多分、ほんの数分の休みだ。ヤジマさんが渋い顔して寄って来てオレの足の床で背を向け、胡坐をかく。

「アレ、本当の母子だったのに赤ん坊と替えちゃうと結構、厄介だぞ。やっぱホンモノの母の胸じゃないと赤ん坊はグズるぞ、きっと」

オレはまだただけど、現場の流れが読めるヤジマさんが、眼下でひそひそ声。

「へえー、アレ、ホンモノの母子だったんすかっ。ママも美人、赤ん坊も白人の子供みたいに可愛かったすよね。おっ、そういえばこのシーンって赤ん坊は、男の子、女の子、どっちなんすかっ？」

「バカだな、おまえ。見てりゃ分かるだろう。あの乳首への吸付きの執念深さは男の赤ん坊に決まってるだろ」

ヤジマさんが五分刈無精髭の強面でオレを見上げて、声を押し殺しながらもとても嬉しそうに力んだ。

「それにしても監督はなんで絵的にはまってる美形母子をとり替えちゃったんか？」

「きっと自然さが欲しかったんだな。出来すぎた絵になっちゃうからな。あの母子だと」と、ヤジマさんが妙に哀しげにベッドのママ役を見つめる。

「でも自然さが欲しいんならホンモノ母子が一番すよね。親子の絆があるわけだから」

しまった。<親子の絆>っていうのはヤジマさんには禁句だった……。

「バカか、おまえ。そう単純じゃねえよ。ニセモノでも自然さを人工的に作り出すのが俺たちの仕事なんだよ」

ヤジマさんがなんか悪怯れて、苛々、胡坐の膝を貧乏揺すり。多分、煙草を吸いたいんだろうけど、生憎、この部屋内は禁煙だ。

スタイリストのねえちゃんが控え室からスタンバイの赤ん坊を抱えて来て、ベッドのママ役に渡す。

ヤジマさんの読みどおり赤ん坊がむずがってグズリ、ふっふっふえーと泣きだす。

「あーあー、やっぱ、こりゃ、笑いまちだな」

「エトウ、おまえ、赤ちゃん撮影ははじめてか？」

ヤジマさんがまた、オレを見上げる。「うっす」とオレは頷く。

「持久戦になるぞ」と呟くと、ヤジマさんが持ち場に向かおうと立ち上がり、窓外を見やった。

台風は勢いを増していて、暗い雨雲の大船団が早送りで流れ、風雨が横殴りで窓ガラスをガタガタ叩いている。仄かな曇天外光が弱々しく不安定にこっちを照らしている。

これじゃオレのレフ板の反射光が意味をなさない。そういやオレはどちらかと言えば雨男かな。なんかこの仕事をはじめて半年、ロケでは雨が多い気がする。口が裂けてもヤジマさんには言えないな、烙印を押されちまう。

でも、ちょっと待て、オレは本当に雨男か？

オレの二十三年の人生でここぞという大事な日はどうだったっけか？

大学の合格発表、結局滑った第一志望校の日は傘差してたような……。

あと他には？ そうだ、あったあったあった、キヨミと別れたあの日だよ。あいつに別れを切り出されて、オレは神に祈るような気持でその日を迎えて、朝起きたら小春日和の気持ちいいピーカンで、祈りが通じたのかって思って、待ち合わせた井の頭公園に行ったんだよな。

池の畔では恋人たちが沢山寛いでとても雰囲気良くて。でも、そこできっぱりオレはキヨミのペースで一方的に別れを言い渡されたんだ。そっか、あの日はあいつにとってのここぞの日だったわけで、あのピーカンって、それって、キヨミが晴れ女だったっていうだけのことじゃないか。クソッ

「エトウっ、バカっ、早くレフ当てろよ。ボケてんじゃねえぞ」

ヤジマさんの怒号が飛んだ。

しまった油断した。赤ん坊が泣き続けているので、まだ小休憩かと思ってたのに、監督は徐にファイナンを覗きだした。

仕切り直しての光の作り込み。

部屋の中では被写体に直接ライトを当てず壁に当て、その反射光で被写体を浮かび上がらせるようにすると、自然な感じになる。そして、今日は応用編。バッテリーライトの人工光と窓からの自然光のミックス。照明セクションはなんにしてもチームワークが全てだ。いつも複数の光を合わせなければならぬ。

キスギチーフが位置につき、メイン光源のバッテリーライトを壁に当てた反射光をキーライトとして母子を包む。

次に、ヤジマさんがママ役の頭や肩のエッジを際立たせるタッチライトを斜め後ろから重ねる。それを見届けて、オレがキーライトを柔らかくするために補完のフィルライト(今日は窓からの外光でトライ)を更に足す。三つの光のバランスをあうんで処理するのだ。

オレは曇天外光を、レフ板を操りベッドのママ役の上半身に当てている。けど光量が僅かすぎてキーライトを柔らかくしてやれない。キスギチーフが監督に寄って行って、外光はあまりアテにできないからいっそ母親がもっと窓に背を向けたほうがいい、とアングルを提案。監督は顎鬚に手を当て一瞬躊躇った後、受け入れた。

光はスタンバイ。

しかし、赤ん坊が一向に泣き止まない。

くっ、勘弁してくれよ。いい加減泣き疲れしないのかよ。今度の入れ替わった赤ん坊は、泣いてるからか、とても不細工でフォトジェニックじゃないと、オレは思うけどな。そのほうが監督は自然さを作れると踏んだわけだが、しかし、なんだっけ、今回のCMは、ガン保険のCMで、<守りたい家族の命>がテーマで、いろんなシーンのコラージュなわけだろ、それで、ウェディングドレスの花嫁とか、公園を散歩する車椅子の婆さんや、ピクニックの家族なんかのロケをここ一週間ぶっ続けで撮って来て、これがやっとならラストシーンで、命を象徴する母と赤ん坊の絵なんだから、こう、ドラマティックにというか、さっきの白人の子供みたいな可愛い赤ん坊の方が絶対合うのにな。

おっと、ママ役のあの女性、良くやるな。小ぢんまり形のいい乳房を差し出した。自分の子じゃないのに乳首を吸わせてやる気だ。赤ん坊が遠慮なく吸付いたよ。んーっ、ベビーパウダーの赤ちゃん臭も漂って、なんかなんともいえない癒しだ。ヤバイよ、勃起しそうだ、ボッキした。しかし、お蔭で赤ん坊が泣き止んだ。今、チャンスじゃん。なのに、監督のやつ、まだ、回さないぞ。どうなってんだよ。乳首吸ってちゃ駄目ってことか。

「ちょっと、キスギくん」監督がチーフを呼んでなにやらヒソヒソ。

撮影現場ってのは、なにか重要なことを決める時はヒソヒソで、決まったことが伝えられる時には怒号が飛ぶ。

「おい、エトウ」チーフがお呼びだ。

監督はどうしても赤ん坊の顔下辺りにホンモノの日溜まりを作りたいとの話。フィルライトの白レフは三脚固定で、もう一枚、日溜り用ミラー銀レフを手持ちでやれと。

「まあ、でもこの悪天候だから日溜まりといえる感じまでは難しいと思うんだけどな」

チーフが珍しく弱気口調で呟いた。

こりゃ、いつ泣き出すか分からない赤ん坊の笑いまち、と、台風の最中での日溜りまち、の二重苦ってわけだ。よし、一丁、こうなりゃオレが晴れ男だって証明してみせるぞ。雲の感じで分かる

雨雲が薄くなってきてる。多分、間もなく台風が目がやってくる。

「大丈夫っすよ。晴れ男のオレがこれから気合いで晴らします。というか、もう直ぐ台風目になりますよ」

「ん、なことは言われなくても分かってるよ。ただ、目が来ても束の間だぞ、お日さまが安定するのは。外光レフのおまえの集中力にかかってるんだからな、頼むよ」

チーフがポンと笑顔でオレの肩を叩く。んーっ、上司だなあー。

早速、フィルライトのレフを三脚に固定し、日溜まり用レフを両手で掲げる。母乳に授かり気持ちよくスヤスヤ眠りはじめた赤ん坊の頭の下にシーツに反射光を当てる。駄目だ。白いシーツがそのまま白いだけだ。光量が弱すぎる。日溜まりなんだから、そこがキラキラ輝いて光の粒子が気持ち良く飛び回らなければ。いろいろレフの角度を微妙に調整してみる。でも変化なし。窓外の雨雲はまだ、立ち退かない。オレは空を仰ぎ、雲退け、雲退け、と念じてみる。変化なし。

—優れた照明マンとは、天気を自在に操れること。

てなわけにはいかないかっ。かれこれ十分は経過。腕が早くも痺れてきやがった。くそっ、なにか楽しいことを考えるんだ。うーっ、ママ役のあの乳房、たわわでプルンで柔らかさそう。顔、埋めてえー、おっと、またまた勃起だ。疲れマラってやつだ。長かったロケの終盤には、いつも疲れマラだ、人肌恋し、だ。でもなんとか今日、このシーンを撮り終えれば明日はオフだ、お休みだ。フーズクでもなんでも行ってやるぞっ。明日、明日、明日、行ってやるぞっ。この、この、台風の野郎が南から運んで来た生暖かい蠢惑な湿気がオレの体にもたらしてる落ち着かない何かもろとも、体中に溜まった全てを抜いてやるーっ。

おっと、ママの乳房の袂、眠る赤ん坊の頭の辺りにキラキラ光の粒子。シーツの白さが飛びそうなくらいポカポカ白。ひょっとして、奇跡の光か……。窓外はしーんと、青空。お天気雨がパラパラ。お日さまが、燦燦と。おーっ、恵み深きかな台風目、到来だ。

* * *

「んじゃ、テイク1行きまーす」ADが号令。

撮影チーム全員に緊張が走る。カメラが回る音が響く。可動式カメラ運搬台—パンサードローリーがファインダーを覗く監督を乗せたまま忍び足でベッドの母子に寄って行って静止—2、3、4、5、6、7秒。監督がゆっくりポーカフェイスの顔を上げる。カメラが停止。彼がカメラも兼ねてるからカットの合図はない。監督はただ、無言だが、自動的にカメラスタッフが三人掛かりでパンサードローリーに付き添い、元の位置に押し戻す。そして、テイク2、3、4。んーっ、ママの乳房の元ですやすや安心して眠っているとあの不細工な赤ん坊でもなかなかいいじゃないか。かけがえのない命のシーン、バッチリ撮れたんじゃないのかな。オレはヤジマさんのほうを見る。なんか浮かない顔して、

「まだまだ、終わっちゃいねえよ。バカ」という顔でオレを見る。

「よし、じゃあ笑ってるの行こうか」監督が徐に言った。

スタイリストのネエちゃんがベッドで眠る赤ん坊を抱き上げ、よしよし、やさしくあやしなながら目

始めさせると、万事休す、ふえふえっ、泣きだした。キャストイング会社のおばさんマネージャーが控え室から赤ん坊のホンモノの母親を連れて来て、オムツ替え。替えた後は、ホンモノの母親が抱き上げ、ママ役の彼女も加わって女たち四人がかりであやすが泣き止む気配がない。もうかれこれ三十分以上経ってしまった、ヤバイ。台風の目は待ってくれない。そろそろこの上空から立ち去っちゃう。

—優れた照明マンとは明日の光なんぞあてにはしない。

今日の、今の光で被写体をベストに見せることに全力を注ぐのだ。

と気張ってみてもオレにはなす術がない。

笑え、笑え、笑え、笑えっ、オレは念ずる。

一向に泣き止まず。

駄目だ、オレの念など、ちっとも通用しない。

様子を窺うヤジマさんがゲジゲジ眉を寄せてワイルド顔。おっ、あのいつもの自慢話をする時と同じ顔だ。ワガママ放題を言って撮影進行を遅らせた某有名女優をビビらせるために、わざとスポットライトを足元に落としてやったというあの話をする時の・・・。

うっしゃ、と床に小さく呟くと、ヤジマさんがタッチライトをそのままに、あやす女たちを掻き分け、赤ん坊の眼前に仁王立ち。両手で自分の顔を覆った。

「いない、いないー」

赤ん坊が泣き止み、ひくっと息を呑む。

室内の時間が止まった。その場の全員が固唾を呑む。

オレは咄嗟にヤジマさんの言葉を思い出した。

彼の離婚が決定的になった夜、泥酔した彼が垂れた言葉。

「エトウ～、優れた照明マンてのは一、光が戯れることを知ってるんだぜー。

光は夜、光らない時は一、昨日や明日とも密に連絡を取り合っていて、内に情報を蓄えててよー、本当はいろいろ感受性強く考えてるんだよー。

でもよー、今日、今、光が光っている時は一、何も考えないで、人やモノをよー、触ったりくすぐったりして戯れてるだけなんだよー、分かるかよー」

ちなみにヤジマさんが手放さなければならない五歳の愛娘の名前は、彼らしくベタに、光子ちゃんという名前で、オレはこの有難い光の話を拝聴した時、ヤジマさんは<光子ちゃん>を<光>に置き換えて、娘のことを言ってるんじゃないかと思ったんだけど、実はあん時ヤジマさんは自分自身のことを置き換えていたのかもしれない。

オレは日溜まり用レフを傾け、ヤジマさんの厳つい白ランニングの背中と赤ん坊を照らした。光がそこで遊ぶように踊り、彼らをくすぐった。

「ばあ～」と野太い声が響く。

「ひゃあっ、、ひゃ、ひゃ、ひゃ」

やった。赤ん坊が笑った。

残念だけど、オレの位置からはヤジマさんの、ばあ～顔は見えなかったが、見えない分、あの強

面が、と想像したら笑いがこみ上げてくる。

赤ん坊はベッドで半身を起こしたママ役の胸元に置かれても、まだ、尚、笑いを持続。アイツ、笑ってるとすごく可愛いな。ヤジマさんが足早に持ち場に戻る。照明は完璧だ。カメラが回る。テイク1、2、3、4。監督がファインダーからゆっくり顔を上げ、小さく頷き、首をこきこき鳴らす。神々しい光に包まれた母子の命のシーン。天国みたいな絵が撮れたに違いない。

「おつかれさまでしたー」A Dの力強い声が室内に響いた。

*

*

暴風雨の中、まるで戦場のような撮影隊の撤去作業が終わり、機材の積み込みを確認し、バンの運転席に乗り込みエンジンを掛けると、助手席のヤジマさんが、

「よう、おつかれ。明日はやっと休みだな」とオレの肩を叩く。

「うっす。おつかれさまでした」

「お前、明日はデートでもすんのか？」

「いえ、優れた照明マンは今日の光と戯れる、ですから。明日のことなんか」

「けっ、ほざいてろっ。どーせ、相手がいねえだけなくせによ」

ヤジマさんがくわえ煙草から紫煙が立ち上るのを、ぼーっと、腕組みして眺めてる。

ここんとこの連日ロケでたっぷり太陽光と戯れたせいで、光合成じゃないけど、オレの体内には溢れんばかりに精子が溜まってる感じ。明日こそは、絶対、フーズクにでも抜きに行くぞ、抜いてやるうっ。ヤジマさんには内緒だけど。

フロントガラスに次々吹き付ける雨粒を、ワイパーが定期的な運動で吹き去ってるのを眺めながら、オレはバンのハンドルをえいっ、と切った。

(了)